



五感と認知症



院長
まなべ やすひろ
真鍋 恭弘

五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）と認知症の関連をご存知でしょうか。嗅覚低下が認知症の初期症状として現れる、耳が遠いと認知症になりやすいなど、五感と認知症の関連が注目されています。そもそも五感是我们たちの生活でどれだけ働いているでしょう。実は、五感はずっとフル活動していますが、意外と気づかれています。何かをしようとする時、五感を意識して働かせるのはわかりますが、五感を意識していない時にも、五感を司る体の器官と脳は盛んに情報をやり取りし、私達が安全な日常生活を送れるように働いています。例えば、喫茶店でコーヒーを飲んでいる時、コーヒーを味覚、嗅覚で楽しんでいるだけでなく、自分の身に危険が迫っていないことを、五感が休みなく働き、安全情報をずっと脳に送り続けてくれているからくつろげるのです。365日、常に脳は五感から情報のシャワーを受け取って生活していますので、五感が途絶えると、一気に脳の活動が低下してしまいます。それが、五感と認知症との重要な関連を示しています。

しかし、五感が大切と言われても、五感は年齢とともに必ず衰え、年齢に逆らうことはできないと思われているのが現状です。ところが、難聴について精密に分析すると、難聴の程度と相関する因子は動脈硬化と騒音暴露歴だけで、年齢と難聴は直接の関係はないということがわかってきました。つまり、加齢と聴力低下の関連は、歳をとると動脈硬化が進行する人が多いため高齢者に難聴が多いという間接的な関連だけなのです。従って、血管を若く保つことは、長寿はもちろん難聴予防、認知症予防にもなります。

当院で昨年からはまった五感ドックは、五感の働き具合をチェックし、何か病気が隠れていないか、年齢に比べ、機能低下が進んでいないかを確認します。自分の五感はまだ大丈夫と思っておられる方にぜひ受けていただきたいと思っています。生涯、若々しく五感を保つ取り組みは40歳を過ぎると必要です。長寿、そして素晴らしい生活の質を維持できる一助にお役立ていただければ幸いです。

五感ドックのお申込み

予約制です。健診センターで予約を承っております。

実施日：月・金曜日 15時30分～17時（1日1名まで）

費用：9,800円

TEL：(0766) 52-2473（健診センター）
月～金 9時～15時、土 9時～11時

「認知症カフェ・なでしこ」 開店！

射水市の認知症カフェ運営事業の委託にて、射水市役所の地域福祉課、大門・大島地域包括支援センター、ボランティアの方々とともに真生会富山病院で認知症カフェを開催しています。

『カフェ・なでしこ』は、認知症の人と家族が地域とつながる拠点・居場所にすることを目的にしています。そのため、何かイベントを開催するのではなく、お茶を飲みながら想いを語り元気になる場所にしています。

カフェでは、はじめに自己紹介を行います。その後、脳の活性化を促すシナプソロジー等で身体を動かした後、お茶を飲みながら認知症の話題を語り合います。認知症の方からは「何を忘れているのかわからないのが不安」、家族の方からは「いつ自分も認知症になるか不安」と言った本音の想いが聴かれます。不安な気持ちばかりではへこんでしまうため、スタッフが参加者の強みをフィードバックし、気持ちを高めるよう工夫しています。

カフェの最後に感想をお聞きすると、「同じ境遇の人がいて心強かった」「頑張っている自分がいるのが分かった」等の意見が聞かれました。アンケートでは、「カフェがどのような場所であってほしいか」の質問に対して、「想いを語る場」「認知症について学ぶ」という声が多くありました。今後も当事者が語り合い、元気になれる場を提供し、認知症の啓発に努めていきます。

(医療ソーシャルワーカー 中村尚紀)



当院1階のレストラン・グリーンハットが会場です

当院では昨年、「認知症ケア会合」が始まりました。二村明広副院長（内科医師）を責任者として、看護師、健診科スタッフ、医療ソーシャルワーカー、フロアマネジャーがメンバーです。院内外で認知症に関する取り組みを推進しています。当院には認知症サポーターを養成する「認知症キャラバン・メイト」も9名おり、認知症ケア会合のメンバーにもキャラバン・メイトがいます。認知症カフェ・なでしこのほか、地域で行われる「認知症サポーター養成講座」にも活躍中です。

「カフェ・なでしこ」を開催して 認知症ケア会合メンバーの感想

◇射水市のモデル事業として、認知症カフェの開催が実現しました。経験のない企画であり、他の市町村の情報が知りたくてこれまでに開催された事例を参考にしてみました。このような集まりが大変望まれていたようで、どこでも好評なことが分かりました。そこで真生会で開催するなら他にはないこともしてみたいと、多くのメンバーが白熱の意見交換を行い、ついに開催を迎えました。特に力を入れたのは、ただ楽しい、美味しいだけの集まりにならないように、ということです。参加者からは認知症の勉強になったという声を多く聞きました。「このような言動に対しては、どう対応すればよいか」と、次から次へと出てくる悩みに対して意見交換ができ、次回も参加したいとの感想を多くいただけたことがとてもよかったと思います。これからも多くの皆様の参加を呼びかけていきたいと思っています。(内科医師・副院長 二村明広)



参加者を迎える手作りの看板

◇認知症になると出かける自信がなくなり、家族の方からはどこに連れて行ってよいのか分からないという言葉が聞かれます。このような悩みを少しでも軽減するために、認知症カフェで交流を

図り、意見交換したり、専門家の情報を聞くことで、早期からお手伝いができるのではないかと思います。
(訪問看護ステーションこころ 看護師 川口忍)

◇カフェでは、否定しない、自尊心を傷つけないなど認知症の方とお話する時の NG トークと OK トークを教えてくださいました。さっそく職場の朝礼などで部署のスタッフと共有しています。外見からは分からない認知症の方とご家族の苦しみに触れ、傷ついたこと、困っていることなどを語り合える場がもっと必要だと思いました。そのお手伝いをさせていただけてうれしいです。
(健診科 高森裕美子)



各種パンフレットも用意してあります

◇奥さんの介護をされているご主人の切実な悩みを聞き、一人で抱え込まれていたことを知り、認知症カフェのように話ができる場は本当に必要だと感じました。認知症カフェのメンバーには、医師、看護師、地域包括支援センターの方、医療ソーシャルワーカーがいるので、悩み事にその専門家がすぐに関わってサポートができるため、とても良いと思います。院外の方と一緒に企画する中で、それぞれ立場は違っても「認知症の方やそのご家族を支えたい」「地域に貢献したい」という共通の思いで取り組んでいることを実感し、連帯感を感じました。
(フロアマネジャー 北村有紗)

部署紹介：さくら病棟（地域包括ケア病棟）

医長：平名浩史、 師長：上條孝子

平成 27 年 10 月 1 日より、4 階さくら病棟が地域包括ケア病棟に転換しました。役割として、主に急性期の治療を終了し病状が安定した患者さんの退院に向けての療養、退院支援を行っています。地域包括ケア病棟協会会長、仲井培雄氏の記事（日本経営グループニュースレター第 33 号）によると、一般病棟を持つ病院の地域包括ケア病棟では患者の 9 割が院内からの転棟が占めるとのことです。ところが当院では、院内からの転棟が約 6 割、内視鏡的大腸ポリープ切除術後の術後管理、在宅療養患者の亜急性疾患、緩和ケア、レスパイトケアなど外来からの入院が約 4 割を占め、よりサブアキュートの機能も発揮しています。いわゆる「急性期ケアミックス型」と共に、「地域密着型」地域包括ケア病棟として、周辺地域のみならずとの連携、協力のもと機能している病棟ともいえます。また、転院による受け入れは、整形外科術後や脳血管疾患、緩和ケア等の方の在宅復帰支援を行っています。緩和ケアは、緩和ケア病棟のような、ご自宅に近い環境ではありませんが、症状緩和を行いながら、身体機能の回復と在宅での暮らしに向けたリハビリやサービス調整、家族指導を行っています。今後も、安心と満足の医療を提供し、「ときどき入院、ほぼ在宅」の一端を担い、この地域でなくてはならない地域包括ケア病棟になれるよう、精進してまいります。

リハビリテーション科 作業療法士：渡辺沙由里
地域包括ケア病棟では、機能訓練のほか、日常生活動作の練習や退院後の環境を見据えたりハビリテーションを積極的に行っています。食事形態や姿勢の指導や、排泄動作・更衣動作の練習、必要に応じてケアマネジャーと共に患者さんの自宅に伺い、ベッド等の位置を検討したり移動手段の提案を行い、自宅退院への不安の軽減に努めています。



診療記録管理委員会の紹介

診療記録管理委員会は、診療記録業務の円滑な運営のため診療記録業務に関する事項を検討、討議することを目的として設置されています。メンバーは医師、薬剤師、看護師、理学療法士、管理栄養士、事務部門から構成されており、2か月に1回委員会を開催しています。

委員会では以下の審議を行っています。

- 1) 診療記録の記載の正確性に関する審査と評価
- 2) 診療記録管理業務の取扱いに関すること
- 3) 診療記録管理の院内規定に関すること
- 4) 診療記録及び関連資料の様式ならびに記載要領に関すること
- 5) 診療記録提供における診療記録管理業務に関すること
- 6) その他、診療記録管理業務の改善と推進に関すること

今年度は診療記録に携わるすべての職員に記録の大切さを周知し、後日活用に意味があることを意識してもらうよう努めました。正確な診療記録作成のため診療記録監査体制の充実、各部署への指導強化を重点項目とし、記載漏れがないか、記載の内容が充分であるかなど審査・監査を行ってきました。結果は、担当医師や部署へ還元するとともに、今後の改善につながるよう周知にも取り組みました。



診療記録に関する事項を多職種で検討

これからも診療記録の質の向上を目指し、活動していきたいと思います。

「地域連携ガイド」ができました！

今年2月、当院の診療内容や機能を地域の医療・介護関係の皆様にお知らせする「地域連携ガイド」が完成しました。

3月初旬「地域連携ガイド」を携えて、各所を訪問しました。今回伺ったのは、白やぎ在宅クリニック（射水市・東太閤山、右上の写真）と小杉南地域包括支援センター（射水市・中太閤山、右下の写真）です。いずれのスタッフの方々も温かく迎えてくださり、記念撮影もさせていただきました。ありがとうございました。

今後も地域の皆様と連携し、求められる医療を担っていきたいと思っています。



岡田事務長（左）と八木先生（右）



小泉所長（左）と柴田主任（中央）

医療・介護関係の
皆様へ随時、お届け
いたします！